

2016年5月

第68号

ぱれっと



(株)北日本ベストサポート
Tel. 018-883-1888

夫婦別姓論議について

平成27年12月16日最高裁大法廷は原告が民法750条の「夫婦は結婚の際に定めるところに従い、夫または妻の姓を称する」との定めに対して、夫婦の姓名は「姓の変更を強制されない権利」であり「憲法に違反する」と裁判を申し立てていた、いわゆる夫婦別姓裁判で民法の定めは「憲法上保証されたものではなく、(夫婦同姓規定は)結婚をめぐる法律に男女平等を求めた憲法に違反しない」と原告の主張を退ける判決を下した。

判決では、「同姓には家族の一員であることを実感できる利益がある」としたうえで「女性側が不利益を受ける場合が多いと推認できるが、通称使用の広がりによって緩和されている」。選択的夫婦別姓制度については、「合理性がないと断ずるものではない」と付言し、国会での議論を促した。

夫婦別姓については、女性の社会進出が著しく、共働き世帯が専業主婦世帯より多くなったことなどが背景にあり、自由民主党国会議員の野田聖子元総務会長も「野田家を守るために結婚後の姓を野田姓とした」としている。

3月2日発刊の読売新聞に夫婦別姓に関する全国世論調査(郵送方式)の結果が公表されている。それによると夫婦別姓制度の導入について反対意見が6割を超え賛成を上回った。

その内訳をみると、導入に反対したのは男性63%：女性59%。年代別では20代で反対44%、賛成55%になっているが30代以降は反対者が50%を超え特に60代では71%、70代では79%が反対しており既婚者で同制度が導入された場合、「同じ姓」にするとした人が87%で、制度導入に賛成する人でも別姓にするると答えた人は29%にとどまった。

制度に賛成する人の主な理由は、①時代の流れだ(48%) ②どちらかの名を名乗らなければいけないというのは不公平だ(35%) ③姓が変わると仕事や付き合いで支障が出る(33%) などとなっており、一方、反対理由は ①子供と親で姓が異なることに違和感がある(75%) ②夫婦や家族間の一体感が薄れる(63%) ③子供の姓を決める際にトラブルが起こりやすい(47%) などが挙げられている。

姓の選択では96%が夫の姓を選択し、一方的に女性が負担を強いられる結果となっており、そのため不平等感につながっている可能性もある。

しかし、筆者は4%の枠で妻名義に変更し数十年に及ぶサラリーマン生活を送ってきたが何ら不利益を被ることはなかった。女性の社会進出と社会的地位向上に何らかの不利益が生ずるのであれば、「通称使用を法的に認められるような対応」も考えられると思うが、要は、個人と家庭(生まれてくる子供を含む)・家族(夫婦双方の親族等)が絆や幸せを感じることが出来る制度でありたい。

ニーチェの言葉

視点を変えたり、逆手にとったりする

求め、追究し続け、それでも得られずについに疲れ果てたのならば、今度からはそれを見出すようにすればいいのだ。

何をしても風が吹いてきて妨害され、どうしてもうまくいかないのであれば、今度からは風を利用してやればいい。帆を高く張り、どんな風が来ても、すべて追い風にしてしまうのだ。

【たわむれ、たばかり、意趣ばらし】

おじけづいたら負ける

「ああ、もう道はない」と思えば、打開への道があったとしても、急に見えなくなるものだ。

「危ないっ」と思えば、安全な場所はなくなる。

「これで終わりか」と思い込んだら、終わりの入口に足を差し入れることになる。

「どうしよう」と思えば、たちまちにしてベストな対処方法が見つからなくなる。

いずれにしても、おじけづいたら負ける、破滅する。

相手が強すぎるから、事態が今までになく困難だから、状況があまりにも悪すぎるから、逆転できる条件がそろわないから負けるのではない。

心が恐れを抱き、おじけづいたときに、自分から自然と破滅や敗北の道を選ぶようになってしまうのだ。

【たわむれ、たばかり、意趣ばらし】

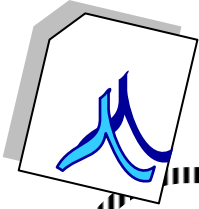
事実が見えていない

多くの人、物そのものや状況そのものを見ていない。

その物にまつわる自分の思いや執着やこだわり、その状況に対する自分の感情や勝手な想像を見ているのだ。

つまり、自分を使って、物そのものや状況そのものを隠してしまっているのだ。

【曙光】



本居 宣長 (江戸時代の国学者・文献学者・医師)

享保 15 年 5 月 7 日 (1730 年)	伊勢国松阪(現在の三重県松阪市)、木綿商の小津家の次男として出生。幼名富之助。少年時代から習字を習い、漢籍を学び、執筆をした。
延享 2 年 (1745 年) 宝暦 2 年 (1752 年)	商売の勉強のため江戸に赴く。翌年帰郷。22 歳で京都へ遊学。医師を堀元厚・武川幸順に、儒学を堀景山に師事し漢学や国学を学んだ。
宝暦 7 年 (1758 年)	京都から松阪に帰り医師を開業。27 歳の時に「先代旧事本紀」「古事記」(賀茂真淵)の書に出会って国学研究に入る。
宝暦 13 年 5 月 25 日(1763 年)	真淵に初見。古事記の指導を受け、入門を希望する。翌年正月に許可を受ける。
天明元年 (1781 年) ~天明 8 年(1788 年)	門人も増加 (164 人⇒487 人)。60 歳の時近畿・大阪・名古屋などの各地を旅行、多くの人と交流し、また、門人たちを激励した。
寛政 4 年 (1792 年)	紀州藩に仕官、御針医格十人扶持となる。
寛政 5 年 (1793 年)	64 歳の時、散文集「玉勝間」を書き始める。
寛政 10 年 (1797 年)	「古事記伝」を完成。
寛政 12 年 (1800 年)	71 歳の時、「地名字音転用例」を刊行。
享和元年 9 月 29 日 (1801 年)	伊勢松阪で死去。享年 72 歳。

オススメの BOOK



『美麗島紀行』

作者 乃南 アサ 集英社

台湾は 1895 年から 1945 年まで 50 年間、日本の植民地だった。
東日本大震災に際しては震災からの 2 年間で台湾から 29 億円の義援金が寄せられた、台湾の人たち一人一人の義援金である。
この金額は世界で米国に次いで 2 番目であり様々な援助の手が差し伸べられた。
韓国などでは同様の植民地時代を経過してきており、その怨念ともいえる反日感情が噴出したままとなっている。
それに対し台湾では極めて親日的な人々が多く日本統治時代何があったか、日本と台湾の市井の人々の交流はどうであったか各地に足を運びその事実関係に迫る。

歩いていますか？

歩いてでかけたのはいつですか？

頭で考えるより、まずは一歩踏み出してみましょ。脳が活性化して健康維持にもなります。

歩くことで脳が活性化する理由

1、歩くときは下半身の筋肉を使います。下半身には全身の筋肉の 2/3 が集中しているため、歩くことで脳への血流量も増えます。さらには、血液と一緒に酸素やエネルギー源となるブドウ糖もたくさん神経細胞に運ばれます。その結果、脳の神経細胞が活性化していきます。

2、歩くことによって、脳の神経細胞が刺激され、脳内のネットワークを作るのに必要な「神経成長因子」が増えます。それによって、脳内のネットワークが促進され認知症予防にもつながると考えられます。また、歩くことで血液が固まりにくくなり、認知症の原因となる脳梗塞も起こりにくくなります。

3、歩くことは、セロトニンやドーパミンといった神経伝達物質の分泌量も増やします。気分が滅入ったり、イライラしたときに歩くことで、心が落ち着くのは気のせいではなく、セロトニンの分泌量が増えることによる効果です。

何気なく行っている「歩く」ことが、脳にとってとてもプラスに作用しています。

こんな人に歩くことをおすすめします。
チェックリストに思い当たることが多い人ほど「歩く」効果を実感するはずです。

チェックリスト

◇ 体を動かすことが苦手。日頃の運動不足を感じている
◇ 仕事や人間関係などで、ストレスを感じている
◇ 気持ちがなんだか晴れず、憂鬱な気分になることが多い
◇ ウォーキングは「1日1万歩」以上歩かないと効果がないと思いきらめている
◇ 新しいことにチャレンジするより、慣れ親しんだことをやりたいと思う
◇ 風邪をひきやすくなったり、体力の衰えを感じている
◇ 血圧の高さが気になっている
◇ 出かけるのが面倒くさい
◇ 知らない人と話したり、地域の活動に参加するのは好きではない
◇ 認知症になるのではないかと心配だ

ウォーキング時の注意点

空腹・満腹・就寝2時間前は避けましょ。

空腹時 脳のぶどう糖が不足している状態で歩けば脳のブドウ糖はますます不足状態になるため、思考力が低下し、体調不良を引き起こす危険があります。

満腹、食後すぐ 血液が消化のために胃腸に集まっているので、筋肉に血液が集まりにくく、得られる効果が少なくなるからです。食後2時間以上経過していることが目安です。

就寝直前 寝る前に歩くと交感神経が刺激され、寝つきが悪くなってしまいます。交感神経を鎮め、リラックスするためにも寝る2時間前までには済ませましょ。

こんな嬉しい効果が期待できるかも…



秋田市千秋公園のつつじ

【編集後記】

5月は、皐月・MAY・誕生石はエメラルド・誕生花はカーネーションです。暦の上（二十四節季）では夏であり、立夏（5月5日、春の色合いが残る時期。新緑美しく風爽やか）と小満（5月20日、万物次第に長じ、天地に満ち始める）です。

薫風に誘われて野山に出かけ、美味しい空気をお腹いっぱい吸って健康を楽しみたい。

人間は大自然に生かされ元気を頂きます。清々しいこの時季、大いに跳躍し生活に仕事にチャレンジしたい。